


| | | |
|--------|--|---|
| 氏名 | おおくら くにひこ (旧姓 江原) |  |
| 出身地 | 佐賀県神埼郡西郷村大字姉川 (現:神崎市神埼町) | |
| 生年月日 | 明治15年(1882)4月9日(牡羊座) | 大倉 邦彦 昭和6年(49歳) 画:武者小路実篤 |
| 身長 | 160cm(5尺2寸) | |
| 家族構成 | 六人兄弟の次男、父江原貞晴、母エツ、兄貞一 | |
| 好きな食べ物 | 茶粥、芋粥、うどん、そば、鰹せんじ (本物を味わうことにこだわり、北大路魯山人の星丘茶寮の会員だった) | |
| 好きな言葉 | 三空(さんくう)、宇宙心(うちゅうしん)、実践躬行(じっせんきゆうこう)、徳感人(とくはひとをかんぜしむ)、随処作主(ずいしょにしゅとなる) | |
| 尊敬する人物 | 道元禅師、タゴール | |
| 好きな本 | 『普勸坐禅儀』『修証義』『典座教訓』『神典』 | |
| 趣味 | 読書、座禅、柔道、書道、墨絵 | |
| 信仰 | 生家は浄土宗。自身は禅宗(特に曹洞宗)に傾倒したが、一つの宗教に囚われることなく、神道やキリスト教などの教えも大切にしていた。 | |

| 年号 | 西暦 | |
|------|------|--------------------------|
| 明治15 | 1882 | 4/9 佐賀県神崎市に生まれる |
| 明治30 | 1897 | 佐賀県立佐賀中学校に入学 |
| 明治36 | 1903 | 東亜同文書院(上海)に入学 |
| 明治39 | 1906 | 大倉洋紙商行天津出張所に入社 |
| 明治45 | 1912 | 大倉文二(大倉洋紙店2代目社長)の養子となる |
| 大正7 | 1918 | 大倉洋紙店・大文洋行・小田原製紙の社長に就任 |
| 大正13 | 1924 | 富士見幼稚園(東京都目黒区)を設立 |
| 大正14 | 1925 | 愛知洋紙店の社長を兼任 |
| 昭和3 | 1928 | 農村工芸学院(佐賀県神崎市)を設立 |
| 昭和4 | 1929 | インドの詩聖タゴールが大倉邸に宿泊、親交を深める |
| 昭和5 | 1930 | 浄牧女子工芸学院(東京都東久留米市)を設立 |
| 昭和7 | 1932 | 大倉精神文化研究所を設立、大倉製作所を創業 |
| 昭和9 | 1934 | 特種製紙の社長を兼任 |
| 昭和12 | 1937 | 東洋大学学長に就任(～昭和18) |
| 昭和23 | 1948 | 図書館用品販売の五輪堂を創業 |
| 昭和34 | 1959 | タゴール記念会理事長に就任(～昭和37) |
| 昭和37 | 1962 | 皇學館大学顧問に就任(～昭和46) |
| 昭和39 | 1964 | 大倉山坐禅会を始める |
| 昭和46 | 1971 | 7/25 死去、戒名「三空院殿禅翁邦彦大居士」 |

【大倉邦彦の名言集】

大倉山記念館1階の「留魂碑」より

一国思想の源泉は真の宗教と教育とにありと信じ、これを建立す

「常思猛進」より

死に際の一日も、今日の一日も変わりはない。短い生命を意義深く、力強く、愉快に生きるためには、明日の日を待たず、今日より取りかかります。礼節を知るものは衣食足るに至ることを信じます。事物の整頓、時間の正確は、心の修養と、大なる関係を持つことを知っております。

大倉精神文化研究所開所式の挨拶より

形式は信念の具象である

「三箇の信条」より

世のため家のために尽くすこと
真心をもって物事を判断すること

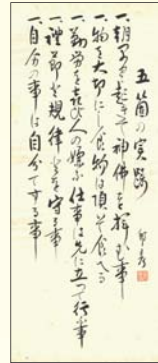


「五箇の実践」より

自分の事は自分でする事

「食前静思」より

この食物が食膳に運ばれるまでには、幾多の人々の労力が加えられていることを思って、感謝いたします。この食物に向かって、旨いからとてむさぼる心、まずいからとて厭う心を起こしません。この食物は私の心身をいやす良薬と心得ていただきます。



【大倉邦彦の交友】

ラビンドラナート・タゴール(詩人、思想家)

インドの詩聖でノーベル賞受賞者のタゴールが昭和4年(1929)に来日したとき、自宅に1ヶ月間宿泊させました。大倉は、タゴールから東西文明の融和や自然との共生を学びました。

嘉納治五郎(講道館柔道の創始者)

柔道有段者だった大倉は、講道館館長の嘉納に依頼して、柔道家高垣信造をインドへ派遣し、柔道の国際化に貢献しました。

五島慶太(実業家、東急グループの創始者)

昭和3年(1928)、大倉は五島と大倉山の頂上を訪れました。大倉は持っていたステッキをぐるっと廻し「この位の土地が欲しい」と言って、五島から研究所の敷地となる約一万坪の土地を購入しました。二人は共に46歳でした。

下中弥三郎(実業家、平凡社の創業者)

下中は、大倉からの依頼により、大倉精神文化研究所の所長(1953～55年)となり、研究所の再建に尽力しました。ベストセラーになった『世界大百科事典』の収益を研究所へ寄付しようとしたこともあります。

【大倉邦彦ゆかりの地】

佐賀県の神埼




大倉邦彦の出身地です。邦彦少年は、ここで葉隠精神を身に付けました。郷里を離れた後も、神埼に女学校を設立したり、地域の学校に多額の寄付をするなど、生涯にわたり大切な場所でした。

中国の上海

東亜同文書院(現在の愛知大学の前身校) 商務科3期生として上海で暮らし、東洋思想の知識と国際感覚を身に付けました。

東京の日本橋

大倉邦彦が3代目社長となった大倉洋紙店の本社、洋紙店の母体となった大倉書店の本社等がありました。ここで商売道や社会貢献の精神を身に付けました。

大倉邦彦の映像・音声作品がご覧になれます→  大倉精神文化研究所のサイトがご覧になれます→  大倉山記念館のサイトがご覧になれます→ 

発行日：2017年(平成29年)7月
編集・発行：公益財団法人大倉精神文化研究所、日比谷花壇・西田装美共同事業体



大倉山記念館
大倉精神文化研究所
創立者
大倉邦彦

プロフィールとその業績

Okurayama Memorial Hall
Okura Institute for the Study of Spiritual Culture

Kunihiko Okura

Profile & Achievements



大倉邦彦の使命事業

大倉邦彦は、すべての人には「宇宙心(神のような存在)」から与えられた一生の間で成すべき使命(=ライフワーク)があると考えていました。

この使命のもと、**大倉洋紙店**・特種製紙・大倉製作所等の企業を経営し、**富士見幼稚園**・**農村工芸学院**・**浄牧女子工芸学院**を設立主宰し、また**東洋大学**学長を務めました。これら様々な事業の根幹に据えられたのが**大倉精神文化研究所**の活動でした。

①大倉洋紙店 (1889年～、現:新生紙パルプ商事株式会社)



大倉書店で成功した大倉孫兵衛は、明治22年(1889)、出版に必要な洋紙を輸入する紙問屋大倉洋紙店を開業します。その3代目社長が大倉邦彦です。大倉は、養祖父大倉孫兵衛・養父大倉文二の経営理念、方針を継承し、さらに社員教育などにも力を入れて、大倉洋紙店を発展させました。

②富士見幼稚園 (1924～1944年)



大倉邦彦は、大正13年(1924)に東京の日黒区に富士見幼稚園を設立しました。

大倉は、幼い頃の学びや体験が人間としての基礎を作り、その後の人生に大きな影響を与えようと考え、幼児教育の大切さを説きました。また、幼稚園の保護者会を発展させた婦人学級「富士見学びの会」や、卒園生を対象とした「富士見日曜学校」も開きました。太平洋戦争の戦況悪化を理由に、幼稚園は昭和19年(1944)に閉園させられました。

③農村工芸学院 (1928～38年、国民女子工芸学院、国民家政学園へと改称)



大倉邦彦が、昭和3年(1928)郷里佐賀県の新井に設立した女子の教育機関です。院長は大倉邦彦、副院長は江原貞一(邦彦実兄)。デンマークの国民高等学校をモデルに、農村の女子に正しい人生観を持たせ、職業教育を施すことを目的とした全寮制の学校でした。同じ目的で、東京の東久留米に浄牧女子工芸学院も設立しました。

⑤東洋大学 (1937～1943年、第10代・第11代学長)



大倉邦彦は、昭和12年(1937)から昭和18年(1943)まで二期6年間にわたって東洋大学学長を務めました。当時、大学は財政難に陥っていましたが、大倉は任期中無給で働き、さらに自らの私財も投じて東洋大学の再建に尽力しました。この間、史学科や拓殖科(現:経済学部)を新設するなど改革を進め、東洋大学が戦後、文科系単科大学から総合大学へと発展していく礎を作りました。

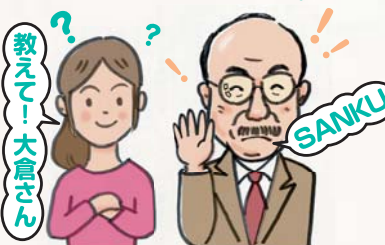
④大倉精神文化研究所 (1932年～、一時期大倉山文化科学研究所と改称)



大倉邦彦は、昭和7年(1932)4月9日、私財を投じて大倉山の地に大倉精神文化研究所を設立しました。研究所には各分野の一流の研究者を集めて、学術研究を進めるとともに、精神文化に関する国内外の図書を集めて附属図書館も開設しました。また、一般の方々を対象とした修養会なども開催していました。研究所の本館が、現在の大倉山記念館です。大倉精神文化研究所は、現在も記念館内で活発な活動を続けています。



揮毫と印影(表紙題字の「大倉邦彦」は、本人が使用していた姓名印です)

みんな知りたい!
大倉邦彦のQ&A

どうして大倉山を選んだの?

昔の大倉山は、静かな田園地帯だったから、騒がしい都会を離れて、心静かに研究や修養をするのにふさわしいと考えたんだ。私の大好きな富士山もよく見えたんだよ。

大倉山に来ると何をしていたの?

研究活動や修養会・座禅会などの指導をしていたんだ。時間ができると作業服に着替えて、研究所の周りの草取りもしていたよ。それらは年をとってからも続けていたんだ。

どうして研究所を創ったの?

私の夢は、みんなが心豊かな生き方をして、日本や世界の文化が発展することなんだ。そのために、社会に貢献出来る立派な人物を育てたいと考えて、伝統文化を学び、心を鍛える場所として研究所を創ったんだよ。

どうして図書館を創ったの?

伝統文化を学ぶためには、哲学・宗教・歴史・文学など様々な本を読むことが大切なんだ。そこで、世界中の本を集めて、みんなが自由に利用できる無料の図書館を創ったんだよ。

大倉山の地名と大倉さんは関係あるの?

もとの地名は、太尾町だったんだ。昭和7年(1932)に研究所を創ったので太尾駅が大倉山駅になり、平成になってから地名も大倉山になったんだよ。



【大倉邦彦のおもな著作物】※附属図書館にて閲覧できます

『感想(其一)～(其十三)』1925～37年
『MY THOUGHTS(英文)』ウエストミンスター社
『心のつどひ』『心の使』『私の使命事業』『使命事業』1928～1941年
『放送 处世信念』千倉書房
『勤労教育の理論と方法』三省堂
『日本産業道』日本評論社
『随想 飛び石』青年書房
『神祇教育と訓練』神祇院教務局指導課
『大倉邦彦選集』潮文閣
『大東亜建設と教養』弘道館
『産霊の産業』大日本産業報国会
『勤労世界観』明世堂書店
『大倉邦彦「院主書簡」一翻刻と解題一』『大倉山論集』46
『大倉邦彦の「感想」一魂を刻んだ随想録一(一部英文対訳)』大倉精神文化研究所



【大倉邦彦に言及したおもな書籍】※附属図書館にて閲覧できます

『大倉邦彦先生献呈論文集 国史論纂』大倉邦彦先生献呈論文集編纂委員会、躬行会
『東亜同文書院大学史』瀧友会
『神埼町史』神埼町史編さん委員会
『特種製紙五十年史』特種製紙株式会社
『日本の建築 明治・大正・昭和』三省堂
『東亜同文書院大学史一創立八十周年記念誌』瀧友会
『東京路上博物誌』藤森照信・荒保宏、鹿島出版会
『奇っ怪紳士録』荒保宏、平凡社
『大倉紙パルプ商事株式会社百年史』大倉紙パルプ商事
『大倉邦彦伝』大倉精神文化研究所
『製陶王国をきずいた父と子』砂川幸雄、晶文社
『講演集 大倉邦彦と精神文化研究所』大倉精神文化研究所
『一隅会の名付け親・大倉邦彦の経営哲学』平井誠二、一隅会
『神埼の偉人35』神埼郷土研究会



附属図書館の書庫

大倉精神文化研究所附属図書館のサイトをご覧ください



【大倉邦彦に関連するおもな論文】※附属図書館にて閲覧できます

『大倉山論集』50-特集 大倉邦彦研究-
『大倉山論集』52-特集 大倉邦彦の図書館事業-
平井誠二「農村工芸学院と大倉邦彦」『大倉山論集』45
勝岡寛次「大倉邦彦の逮捕から釈放まで一極東国際軍事裁判・国際検察局(IPS)尋問調書の分析から一」『大倉山論集』46
田代武博「大倉邦彦における「行の教育」一思想的枠組みと佐賀県における実践一」『大倉山論集』46
伊香賀隆「大倉邦彦の「宇宙心考」一その揮毫から浮かび上がる思想一」『大倉山論集』58
林宏美「大倉邦彦と富士見幼稚園20年のあゆみ一戦前・戦中の私立幼稚園の資料から一」『大倉山論集』62
平井誠二「近代の肖像171～173 大倉邦彦」『中外日報』2007年11月13日～20日
西岡和彦「奉公無我の精神一忘れられた哲人、大倉邦彦小伝一」『大法輪』78-12～79-2

【大倉邦彦を扱った映像・音声作品】※附属図書館にて閲覧・貸出できます

①「大倉邦彦と巡る大倉山記念館」 ②「味の生活 和の力」
③「未来に羽ばたく大倉精神文化研究所」 ④前田晴美「大倉山の大倉邦彦さん」